

全学向け日本語プログラム 2021年度

俵 山 雄 司

1. プログラムの概要

このプログラムは、名古屋大学に在籍する留学生(大学院生・研究生など)、外国人研究員・教職員などを対象に、日常生活や大学での研究生活に必要な日本語の運用能力を養成するための複数のコースを提供している。

2021年度の開講期間は、以下の通りである。

(1) 春学期

初級コース：2021年4月19日(月)から7月30日(金)まで(14週)

中級・上級コース(漢字クラスを含む)：2021年4月12日(月)から7月30日(金)まで(15週)

(2) 秋学期

初級コース：2021年10月11日(月)から2022年2月2日(火)まで(14週)

中級・上級コース(漢字クラスを含む)：2021年10月4日(月)から2022年2月2日(水)まで(15週)

2020年度は、COVID-19の感染拡大により1クラスの受講者数が減少し、不安定なクラス運営を強いられた。そこで、今年度は、安定的なクラス運営を実現するため、従来共有していた上級コースに加え、中級コースも短期留学生(NUPACE)日本語プログラムと共有することとなった。そのため、初級コース以外は、今年度より15週間の授業として開講している。なお、漢字クラスには初級レベルのものもあるが、中級・上級コースと同様に15週間となった。

2. カリキュラム

プログラムは、大きく分けて以下の2つのコースから構成されている。

(1) 初級・中級コース

ゼロ初級から中級コースまでの学習者を対象とした、レベル別のコースである。受講者は、学期前に実施され

るプレースメントテストによって、7つのレベルのコースに振り分けられる。

初級Ⅰ(SJ110)・初級Ⅱ(SJ120)・初級Ⅲ(SJ210)・初中級(SJ220)の4つのレベルでは、週3コマの授業がすべて内容的に連続しており、14週間で計42コマを通して学ぶことで日本語力の伸長を図るものである。なお、秋学期は、初級Ⅰ(SJ110)の受講登録者数が50名を超えたため、急遽同内容のクラスをもう1クラス設置し、2クラス体制で実施した。

上記に続く、中級Ⅰ(SJ310)・中級Ⅱ(SJ320)・中級Ⅲ(SJ330)の3つのレベルでは、従来の週3コマから週5コマに変更となった。5コマはそれぞれ、読解・聴解・作文・会話・文法という技能別の編成になっており、週1コマだけを選んで受講することも可能となっている。

これ以外に、アラカルト科目として、レベル別の漢字クラス(漢字Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)、「オンライン漢字」コースも用意されている。

テキストは、初級レベルは2020年度まで『A COURSE IN MODERN JAPANESE [REVISED EDITION] VOLUME ONE』『同 VOLUME TWO』を使用していたが、今年度は、春学期の初級Ⅰを皮切りに、順次『まるごと 日本のことばと文化』(三修社)シリーズに切り替えていった。初中級も春学期より同シリーズに切り替えた。中級Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは、各スキルで(科目)で授業担当者がテキストを指定、あるいは自作教材を使用している。

レベル別コース

初級Ⅰ	週3コマ				
初級Ⅱ	週3コマ				
初級Ⅲ	週3コマ				
初中級	週3コマ				
中級Ⅰ	読解	聴解	作文	会話	文法
中級Ⅱ	読解	聴解	作文	会話	文法
中級Ⅲ	読解	聴解	作文	会話	文法

アラカルト科目（自由選択）

漢字Ⅰ	漢字Ⅱ	漢字Ⅲ	OL 漢字
-----	-----	-----	-------

(2) 上級コース

上級コースは、日本語能力試験N1あるいはN2レベルに既に合格した者を対象としたコースである。すべてのクラスがアラカルト科目であり、自由に選択して受講できる。

①「中上級（SJ410）」（5科目、各週1回90分）クラス、②「入門講義」（3科目、各週1回90分）クラス、そして、③「学術日本語」（週1回90分、同内容が2クラス）から構成されている。

①は、中級コースの技能別の日本語科目の上位レベルに位置するものである。読解・聴解・作文・会話・文法の5科目が設定されている。学問的・社会的話題の講義・講演を理解する（聴解）、目的や文章の種類にあわせて読み方を変えながら文章を読む（読解）、わかりやく体系的なプレゼンテーションを行う（会話）、論理的に議論を展開しながらレポートを書く（作文）ことなどについて学ぶ。

②は人文系の専門分野（日本語学・日本文学・日本語コミュニケーション論）に関する入門的な知識について、やさしい日本語を用いた講義形式で学ぶものである。それぞれ秋学期開講のものを「Ⅰ」、春学期開講のものを「Ⅱ」とナンバリングしており、同テーマの科目ではあるが、学期毎に内容は異なっている。

③は、留学生、あるいはその指導教員が持つ、アカデミックライティング力養成のニーズに応えるための科目である。目的は、構成が明確で、文法や表現が的確な日本語の論述文が書けるようになることである。

これ以外に、webを通じた添削を含む「オンライン読解・作文」コースも用意されている。

アラカルト科目（自由選択）

中上級（SJ410）読解
中上級（SJ410）聴解
中上級（SJ410）作文
中上級（SJ410）会話
中上級（SJ410）文法
入門講義 日本語学
入門講義 日本文学
入門講義 日本語コミュニケーション論
学術日本語
オンライン読解・作文

3. 受講状況

受講登録を行った者は、春学期200名、秋学期221名であった。数字は、前年度（2020年度）の春学期180名、秋学期221名からやや増えている。

受講登録者を属性別にみると以下ようになる。

	春学期	秋学期
博士前期学生	68	84
博士後期学生	54	47
研究生	39	68
研究員	18	18
教職員	11	11
学部生	0	0
その他	10	4
計	200	232

春学期は博士前期学生・博士後期学生・研究生の順で受講者が多く、秋学期は、博士前期学生・研究生・博士後期学生となり、研究生の順位が上がっている。

次に、受講登録者を所属先別にみると以下ようになる。

	春	秋
文学部・人文学研究科	22	42
教育学部・教育発達科学研究科	3	4
法学部・法学研究科	15	35
経済学部・経済学研究科	12	7
情報学部・情報学研究科	12	16
理学部・理学研究科	19	16
医学部・医学研究科	10	10
工学部・工学研究科	47	36
農学部・生命農学研究科	12	9
国際開発研究科	21	23
多元数理科学研究科	8	6
環境学研究科	14	25
その他	5	3
計	200	232

春学期は工学部・工学研究科が最も多く、受講者全体の約25%を占め、それに、文学部・人文学研究科と国際開発研究科が続いている。秋学期は、文学部・人文学研究科がトップになり、工学部・工学研究科が2位、法学部・法学研究科が3位となっている。受講登録者数の所属先別の数値を見始めた2019年以降で、工学部・工学研究科以外が受講者数トップになったのは初めて

の出来事である。

2020年秋学期の文学部・人文学研究科は、同時期で唯一前年の数字（32名）を上回るなど、他部局と比べて、COVID-19の感染拡大の影響があまりないように見られたが、今回の文学部・人文学研究科の初のトップもその流れと関連がある可能性がある。

4. 今期の評価と今後の課題

2020年度は、海外からオンラインで受講する学生のためのテキストの調達・送付に大変苦労した。今年度も、同様に海外からの受講者が大半の状態での授業実

施となったが、初級から初中級レベルに関しては、書籍版に加え、デジタル版もある『まるごと 日本のことばと文化』シリーズを順次導入し、その点で労力はだいぶ軽減された。

また、受講者・教師ともオンライン授業の実施の際に使用される ZOOM や NUCT（名古屋大学の提供する、web上の学習管理システム）の扱いに慣れたこともあり、より効率的に学習・教育を進めることができたと言える。対面授業が復活したとしても、オンライン授業へ切り替えなければならない事態も起こりうると予想している。そのような事態への備えが今後の課題である。